

一〇二三年一月一三日

燒栗の爆ぜて振り向く初大師
小氣味よき音たてて摘む青菜かな
絨毯に靴音しづむ夜のホテル

なつき
愛正
ひのと

一〇二三年一月一二日

初稽古待てる幼なの正座かな

ひのと

一人鍋つつきて味の薄きこと
冬帽を目深に市の刃物研ぎ

たか子
なつき

一〇二三年一月一一日

酒蔵の白壁まぶし寒の晴

せいじ

湯気立て帰郷の子らを迎えけり
畠大根もろ肌脱ぎに競り上がり

かえる
あひる

帳綴や祖父の代よりこの判子
白息を残し言葉の消えにけり
一〇二三年一月一〇日

ひのと

糊強き襟を立たすや初仕事

うつぎ

一〇二三年一月九日

赤銅の太陽沈む霧の沖
大焚火一人となつてしまひけり
一抜けし人の噂や浜焚火
ファスナーを喉まで上ぐる寒の入

みきお
うつぎ
ひのと
せいじ

一〇二三年一月八日

逞しき冬芽の枝に御籤結ふ

はく子

七種の火をとめ塩をひとつまみ

みきえ

靈峰の芯となるべく滝凍る

ひのと

霜枯の野より翔ちたる羽音かな

むべ

寒に入る火種の如き船尾灯

ひのと

一〇二三年一月七日

新海苔を炙れば磯の香餅に巻く

かえる

息白く泥のボールを抱き帰る

ひのと